



「北方領土」を前にして何を感じますか？

写真提供：佐藤文彦(稲生沢中教諭)



四島(しま)のかけはし(納沙布岬)で記念撮影

北方領土青少年等現地視察事業参加者

稲 梓 中…土屋誘作、渡辺麻彩
 稲生沢中…杉田 駿、関 彩月、瀬戸 翔、田中裕子
 下田東中…水野孔明、長谷川遥大、土屋太一、笹本寧々
 下 田 中…山本真奈海、藤田未紘、大年和真、松下友貴



長谷川根室市長の講話でより理解が深まりました。

生徒たちが得た経験や思いの発信が下田の未来につながってほしいと願います。

と確信しています。

重要なことと感ずることができた運動に関わっていくことの重要性を感じることができた

再認識することで、今後市民レベルで北方領土返還要求運動に携わっていくこと

北方領土との深いつながりを再認識することで、今後市民レベルで北方領土返還要求運動に携わっていくこと

北方領土を間近に感じ、下田市と北方領土との深いつながりを再認識することで、今後市民レベルで北方領土返還要求運動に携わっていくこと

北方領土を間近に感じ、下田市と北方領土との深いつながりを再認識することで、今後市民レベルで北方領土返還要求運動に携わっていくこと

旅を通じての思い

今回参加した生徒も、北方領土を間近に感じ、下田市と北方領土との深いつながりを再認識することで、今後市民レベルで北方領土返還要求運動に携わっていくこと

北方領土を間近に感じ、下田市と北方領土との深いつながりを再認識することで、今後市民レベルで北方領土返還要求運動に携わっていくこと

北方領土を間近に感じ、下田市と北方領土との深いつながりを再認識することで、今後市民レベルで北方領土返還要求運動に携わっていくこと

近くて遠い故郷

個人的に感じたこととしては、羅臼町で聞いた歯舞群島多楽島の元島民という方の体験談の中で、ソ連兵から受けた仕打ちや、命がけで海を渡り北海道の地へ逃れてきた様子など、元島民の壮絶な体験を聞くことで、彼らが受けた心の傷の深さや、四島に対する望郷の念を強く感じました。

近くて遠い故郷。

私は祖父を知りません。祖父はソ連によって、終戦後シベリアに抑留され、祖国の地を二度と踏むことなく帰らぬ人となりました。祖父が抱いていたであろう、祖国へ帰りたいという望郷の念と、元島民の近くて遠い故郷への望郷の念が重なる思いがしました。



下田市と北方領土

1854年10月、ロシア使節プチャーチンが乗ったディアナ号が下田に來航しました。彼らの目的は日口北方国境の画定と開港でした。

交渉の開始直後に安政の大震災による大津波により、下田は壊滅的な被害を受けました。

交渉はこのような状況下でも続けられ、1855年2月7日、長楽寺において日魯通好条約が締結されました。

この条約で両国の国境を択捉島とウルツプ島の間に定め、択捉、国後、色丹、歯舞の4島は日本の領土とし、ウルツプ島から北の千島列島はロシア領とすることが確定しました。また、樺太は両国民混住の地とされました。

近くて遠い北方領土 直に感じる、領土の意識

～平成25年度北方領土青少年等現地視察事業に市内中学生が参加しました～



知床峠から望む国後島

代表寄稿者 学校教育課課長補佐 佐々木 雅昭

今回、北方領土返還要求静岡県民会議が主催する平成25年度北方領土青少年等現地視察事業に、下田市から14名の中学生、教員1名と市職員2名が参加しました。

この事業は、次世代を担う中学生が、北方領土の視察、元島民の体験談などを通じて、北方領土問題を身近な問題として捉えるとともに、北方領土返還要求運動を継承し、次世代へとつないでいくことを目的としているものです。

参加した中学生達はもちろん、随行者にとっても、非常に貴重で有意義な体験となりました。

タイトな4日間の日程の中で、羅臼町と根室市に滞在し、元島民の体験談や根室市長の講話、様々な資料などで北方領土問題や返還要求運動の歴史を学びました。

資料や講話の中には「1855年2月7日に長楽寺にて日魯通好条約が締結されたという史実」、そして「下田」という言葉が必ず現れ、下田が日口友好原点の地であることが再認識されました。

さらには実際に北方領土を目の当たりにすることで、北

方領土への関心も自然と高まってきました。

これが北方領土

羅臼町から出発した国後島の洋上視察。中間海域から国後島までの距離は約15kmしかなく、島の断崖の様子もはっきりと見えました。

しかし、ここには見えない鉄のカーテンがあり、日本固有の領土でありながら自由な往来が制限されているという切ない現実も実感しました。

納沙布岬から見る歯舞群島貝殻島に至っては、その距離約3.7kmです。貝殻島に建つ灯台もはつきりと見え、わずかな距離の先に見える島がロシアに事実上、支配されていることを思うと、「この灯台は日本が建てた」という説明に切なさを感じました。

重要なのは伝えること

羅臼町での元島民の体験談、また根室市長の講話に共通していたのは、終戦当時17,200人余りだった元島民数は、高齢化も進み4割ほどになり、今回訪問団の中心となった中学生など、若い世代が北方領土返還要求運動を継承していくことが重要であるということです。